

## ふつうに愛、

### 【登場人物】

正雄

佳恵

マリコ

ヒロシ

マリコとヒロシが登場する。

ヒロシ ……トラブル？ ああ、そうですか。どれくらいかかりますかね？ ……20分、（マリコに）どうしよつか。

マリコ あたしは大丈夫。

ヒロシ あ、じゃあ待ちます。……ええ、はい。

マリコとヒロシはイスに座る。

ヒロシ 少し緊張してるかい？

マリコ ええ。だって、あたしはまだに慣れないのよ、こういう、超高級ラブホテルみたいところ。

ヒロシ いや、超高級ラブホテルみたいところじゃないよこは。正真正銘の超高級ラブホテルだからね。マリコ 待って。あたしそういう意味でいったんじゃないのよ。これだけは言わせて。あたしの名誉にかかわることだから。あたしは知っていたのよ、ここが正真正銘の超高級ラブホテルだって。だって、そんなに世間知らずじゃないわ。

ヒロシ じゃあ、なぜ超高級ラブホテルみたいところなんて言ったんだい。

マリコ だってそれは、つまりね、いいよそんなことは。つまらないことだわ。

ヒロシ キミが言い出したことじゃないか。

マリコ いいのよそれは。私は知ってるのよ、超高級ラブホテルのなんたるかを。なにせ超高級ラブホテルですからね、つまりそれは超高級な愛のホテルなのよ。

ヒロシ キミそれは世間知らずというものだよ。いいかい。「アイ・ラブ・ユー」は「私はあなたを愛してる」だ。「ユー・ラブ・キャット」は「あなたは猫を愛してる」だ。となると「超高級・ラブ・ホテル」は「超高級はホテルを愛してる」だろう。

マリコ そんなの、それくらいあたしだって知ってるわ。「超高級はホテルを愛してる」でしょ。知ってるわよそれくらい。でもそれってよくよく考えるとおかしいことだと思わない？ だって超高級ラブホテルでは人

が人を愛するのよ。超高級がホテルを愛するわけじゃないじゃない。

ヒロシ まあ、いいじゃないか、そういう哲学的な話はつまらないことだよ。

正雄が登場する。

マリコ あ、

ヒロシ 知り合い？

マリコ いや、でも、別人かもしれないわ。

正雄 一人は後で。……ああ、そうですか。……ええ待ちます待ちます。はいはい。(メガネを拭き始める)(マリコとヒロシに) あ、ここいいですか。

ヒロシ ええ、どうぞ。

正雄 どうもどうも。

正雄はイスに座る。

マリコ お父さん……。

正雄はメガネをかける。マリコが目に入る。

少し間を置いて、正雄は取り乱しイスからコケる。

正雄 (パニック状態で、様々なジェスチャーを交えながら) お

おおお、おおお！ おお、おお、おおお！

ヒロシ まあまあ落ち着いて下さい。

正雄 (マリコを指して) マリコ……！ (自分を指して) 父さん……！ (ヒロシを指して) 誰だ……！

ヒロシ 山岡ヒロシです。

正雄 誰だ！

ヒロシ は？ ですから、山岡ヒロシです。

正雄 そんなこときいてるんじゃないんです。私の娘となぜここいるのかきいているん です。

ヒロシ きかなくてもわかるでしょう。ラブホテルなんですから。

正雄 そうではなくて、私は、どういうつもりかときいているんです。

ヒロシ は？ ですから、愛を育むつもりですよ。

正雄 あなたよく娘の父親にそんなこと言えますね。

ヒロシ はあ。

正雄 おいマリコ、お前なにしてたんだ。

マリコ なにが？

正雄 誰だこの男は？ お前にはきちんと夫がいるじゃないか。これはあれだ。浮気だぞ。

マリコ 浮気じゃないでしょ。不倫でしょ。

正雄 どっちでもいいよ。

マリコ よくないわよ。私は真面目に不倫してるのよ。

正雄 どっちでもいいんだそれは。父さんがショックな

ことにかわりないだろ。

マリコ だいたいお父さんこそ、なんでこんなところに  
いるの？

正雄 ……え？ なんだその質問は？

マリコ なんでこんなところにいるの？ つかいてるのよ。

正雄 (上着を脱ぎながら) なるほどな。つまりマリコ、お  
前はスフィックスだったんだな。なにせ、そんな難し  
い質問は初めてだからな。

マリコ は？

正雄 でも、違うんだ、父さんがこうしているのは、つ  
まりは、そう、つまりは、母さんと愛を育みたいと、  
そう思ったんだ。そう、つまりね、違うんだこれは。

ヒロシ (服を脱いでいる)

正雄 おい、なぜ君は服をぬいでいるんだ。

ヒロシ なぜって、だってあなたも脱いでいるでしょう。  
どうして僕が脱いではいけない んです。

正雄 いけないとは言っていないんです。いや、いいん  
ですそんなことは。

佳恵が登場する。

佳恵 あ、正雄さん。お待たせ。

ヒロシ どなたですか？

正雄 いやあ、なるほど、あなたもスフィックスだった

のですね。難解な質問だ。

ヒロシ はあ。

正雄 (佳恵に) 佳恵ちゃん、ちょっと向こうに行って耳  
塞いでもらっていいかな。

佳恵 どうして？

正雄 いいからいいから。

佳恵 ええ。

正雄 ……(ヒロシに) 妻です。

ヒロシ 奥さんですか。

正雄 ええ。

マリコ 誰？

正雄 なんだマリコ自分のお母さんの顔も忘れちゃった  
のか。

マリコ は？ どういうこと？

正雄 これは、違うんだ、だって、これは、お前らだっ  
て同じなんだからな。

マリコ 一緒にしないでよ。お父さんのはどうせ浮気な  
んでしょ？ 私たちは不倫してんのよ？

正雄 いや、いいんだよそんなことは、

佳恵 まだ？

正雄 と、とにかく、彼女はとても一途なコなんだ。父  
さんのこと独身で子供もいないと思っている。

マリコ (脱ぐ)

正雄 なぜ脱ぐ？

マリコ は、文句あんの？

正雄 いや、いいんだそれは。とにかく、お願いします。  
ことが荒立たないように、ね、ね。(佳恵に) はい、もういいよ佳恵ちゃん。

佳恵 なんだったの？

正雄 なんでもないよー。ふふふ、(マサオたちに) いやあどうもどうも失礼しました。  
マリコ おいじじい。

佳恵 え？

正雄 いやいや佳恵、いいんだ構わなくて。

佳恵 だって、なんなの、知り合い？

正雄 いや、つまりこれは、ゴルフ仲間なんだ。わかるかい、ゴルフをする仲間だよ。

佳恵 へえ。気まずいね。

正雄 ……あははは、気まずいよなあ、ラブホテルでゴルフ仲間に遭っちゃうなんてな。あはは、あはは。

マリコは正雄の足を蹴る。

正雄 すいません。

ヒロシ ……(佳恵に) あなたは、そちらの方とはどういううご関係なんですか。

佳恵 どういうご関係？ 面白い質問ですね。男女がラブホテルに来てんだから、そんなの恋人に決まってる

じゃないですか。

正雄 そりや、そうじゃないですか。恋人じゃなきゃこんなところくるわけないでしょう、(佳恵に) なあ？

佳恵 (脱いでいる)

正雄 どうしてお前まで脱ぐんだ。

佳恵 え、ごめんなさい。ダメよね。そりやそうよね。

正雄 いや、別にダメというわけじゃないんだ。いいんだ。それはそれで。

ヒロシ じゃあ、奥さんではないんですね。

佳恵 ええ。将来の奥さんですけどね。

ヒロシ そうですか。

正雄 へへへ、まあまあ、

ヒロシ じゃあ、愛人でもない。

佳恵 愛人？

正雄 何言ってるんですか、バカ言わないで下さいよ。

ヒロシ そうですか、失敬。

佳恵 そちらは、恋人同士なんですか。

ヒロシ ええ。まあ、将来の夫婦ですけどね。

正雄 え？

ヒロシ はい？

正雄 今なんて言いました？

ヒロシ ホールインワンって難しいよねって言いました。

正雄 言ってませんね。将来の夫婦って言いました？

ヒロシ ええ。二ヶ月後は夫婦になってる予定です。

正雄 二ヶ月後……!!?

ヒロシ どうかされましたか、ゴルフ仲間。

正雄 ほほう……、いやしかし、それは、気が早いんじゃないですかねえ。

ヒロシ しかし、2年前から話し合ってきたことですから。

正雄 2年前!! 2年前からお付き合いされてるんですか?

ヒロシ おかしいですか?

正雄 いやあ、おかしくは、ないですかねえ。なにせゴルフ仲間の話ですからねえ。ただもし仮に、私が彼女の父親だとして、しかもこれが不倫だったとすれば、私はキミを八つ裂きにしていくでしょうね。

ヒロシ 心配には及びません。僕は空手五段ですから。

正雄 そうですか。それは大丈夫だ、ははは、

ヒロシ 笑わないでくださいよ気持ち悪い。

正雄 あはは、失礼失礼。

ヒロシ もう、本当に気持ち悪いんですから。バカ。

正雄 もう限界だ。なんだこれは、俺は、複雑だぞ! 不倫相手とご対面してる俺、娘の不倫現場に居合わせた俺、ラブホテルにいるところを娘に見られて気まずい俺、浮気がばれないようにひやひやしてる俺、なんだこれは、俺は4人に分裂したいよ!

佳恵 正雄さん。

正雄 いいんだ。正直に言うよ。俺には奥さんがいるんだ。つまり、これは浮気なんだ。

佳恵 そんなの知ってるわよ。

正雄 知ってたのか……?

佳恵 だってさっきここで言ってたじゃない?

正雄 ええ! だって、キミは耳を塞いでいたんじゃないのか?

佳恵 そんなの、塞いでたって、聞こえるものは聞えるでしょ?

正雄 なんてことだ……!

佳恵 私はそれでもいいんです。私が正雄さんを好きでいる。それだけで私の人生なんです。

正雄 佳恵……。

佳恵 (脱ぎながら) 私の隣に正雄さんがいる。私が冗談なんかを言う。正雄さんが笑う。それを見て私も笑う。それが、私の人生全てなんです。人を笑顔にする。十分じゃありませんか、それで。

ヒロシ (脱いでる) (拍手) 素晴らしい。ご立派です。

佳恵 あなたも、これ以上正雄さんをいじめないであげてください。

マリコ かばうんですね。

佳恵 ええ。……そうなのね、あなたはきつとまだこの話をきかされていないのね。

マリコ なんの話ですか?

佳恵 実は、正雄さん、お医者さんに言われたのよ。  
マリコ 何を言われたんですか。

佳恵 あなたが探していたのは、内科医ではないかい？  
って。

一同沈黙。

マリコ なるほどねえ。

佳恵 ……正雄さん、あと3年しか生きられないんです  
って。

マリコ え？

正雄 すまない。言おう言おうとは思ってたんだが、実  
は、そうなんだ。

マリコ ああ……。

沈黙。

マリコ (佳恵に) すみません。

佳恵 ええ。

マリコ もう1回言ってもらってもいいですか。

佳恵 ええ。あと3年しか生きられないんですって。

マリコ 私が？

佳恵 違うわ。あなたじゃないわ。あなたのお父さんの  
ことよ。

マリコ 私のお父さんって、一人目のお父さんですか。

それとも、二人目のお父さんですか。

佳恵 複雑な家庭なのね。わかったわ。一人目のお父さ  
んか、二人目のお父さんか、私は知らないけれど、わ  
かりやすく教えてあげる。今ここにいて、正雄さんが、  
あと3年しか生きられないのよ。

マリコ 三人目のお父さんですか。

ヒロシ キミのお母さんは、男の人と相性が悪いんだね。

正雄 (脱いでる) 今まで真面目に働いて、何も悪いこと  
してない人間が、あと3年で死ぬんだぜ。笑っちゃう  
よな。

佳恵 あははは。

正雄 笑うな！

佳恵 正雄さんどうして？ 正雄さんが笑っているなら、  
私も笑っていたい。

正雄 すまない、言い過ぎた。

佳恵 (脱ぎながら) ですからね、正雄さんのことは責め  
ないであげてほしいんです。……残り3年しか生きら  
れないんです。好きなことをさせてあげたいじゃない  
ですか。正雄さんに、笑顔でいてもらいたいじゃない  
ですか。

ヒロシ なるほど。

佳恵 私、正雄さんの苦しみを考えると、苦しくて苦し  
くて、死にそうなんです。

マリコ 大丈夫ですか。

佳恵 苦しい、苦しい。本当に死にそう。もしくは、妊娠しそう。

ヒロシ どっちですかねえ？

佳恵 これは、きつと、死ぬ方だわ。

ヒロシ はあ、難儀ですねえ。

佳恵 私、きつと、あと、57秒で死ぬわ。

ヒロシ そうですか、(腕時計を見て) 確かめてみましょうか。

佳恵 でも、お願い。死ぬ前に、これだけは、言わせて。マリコ なんでもききます。なにせ死ぬ前の一言です。

誰の人生でも、死ぬ前の一言というのは、非常に重要なものだと思います。しかし、それに比べて生まれるときの一言というのはあまり重要ではないのでしょうか。なにせ、みんな一様にオギャーとしか言いませんから。ですが、死ぬときの言葉はみな違います。なにせみんな、きちんと言葉を話すことができるのですから、

佳恵 言わせて……！

マリコ すみません、どうぞ。

佳恵 あなた、トラックで、荷物を運んでいるのね？ もしかしてあなた、運送屋さんなの？ ……うん、そうやあ……。

マリコ ……。

佳恵 ダイ・ハード……。

佳恵は死ぬ。

正雄 佳恵？

ヒロシは佳恵の脈をはかる。

ヒロシ ああ、死んじゃいましたね。

正雄 ……！

ヒロシ 大変な人生でしたね。

マリコ でも、こうしてみると、死ぬ前の一言っていうのも、あまりなんともないわね。

ヒロシ そりゃあ、死ぬ前からって、普段と変わるものではないよ。しかしそれよりも重要なのは、この方が死ぬまでに63秒要したということだ。57秒で死ぬと言っていたにもかかわらずだ。

マリコ それはでも、そういうものでしょ。だって、未来のことなんか誰にもわからないんだから。

ヒロシ そう、そこなんだ重要なのは。未来のことは誰にもわからない。だから難しいんだ、人生の計画を定めるのは。

正雄 どうすればいいんだ……？

ヒロシ はい？

正雄 警察、呼んだ方がいいのか？

ヒロシ でも、そしたら、あなた逮捕ですよ。あなたが殺したんですから。

正雄 え、俺が殺したのか？

ヒロシ そうでしょう。あなたのことを思って、苦しめて死んだんですから。

正雄 そんな……！

ヒロシ まあ、ドンマイ。

正雄 佳恵、待ってるよ、俺もすぐ行くからな。あと3年。あと3年だ。……おい、ちよつと待て、あと3年だぞ。どうしてお前たちはそんなに反応が薄いんだ。

マリコ は？

正雄 かわいそうだろ。もつとかわいそうな感じになるのが筋だろ。

マリコ そんなこといったら、これなんてもう死んじやったのよ。

正雄 おい、これっていうな。

マリコ だってこれでいいでしょう。もう物なんだから。正雄 お前なんてこというんだ。

マリコ なによ、人が死んだくらいで騒いで。だって、人間なんて死んでる方が普通なのよ。生まれる前はずっと死んでたんだから。生きてる方が変なのよ。

正雄 なんだそれは。

マリコ なんなのよ。3年で死ぬ？ いいじゃない、そ

の3年間の人生の計画が立てられるんだから。私たちがなんていつ死ぬかわからないから、人生の計画が定まらないのよ。

正雄 それは、そういうことじゃないだろう。

ヒロシ ま、天罰が下ったんでしょね。これと浮気なんかしていたから。

正雄 これっていうな。天罰だ？ いやあお前にも天罰が下るな。お前たちも浮気してんだからな。

マリコ だから不倫だって言ってるじゃない。

正雄 だから同じだろ、浮気も不倫も。

マリコ どうして同じなのよ。わかってないわ。どうせお父さんはこれのこと本当は愛してなかったんでしょ。

正雄 愛していたよ。本気で愛していたんだ。

マリコ そう、本気でね。

正雄 お前らはどうなんだ。え？（ヒロシに）お前は、マリコのこと本気で愛してんのか？

ヒロシ ええ。僕は、普通に愛してますよ。

正雄 ほら見たことか。マリコ、こいつはお前のこと普通に愛してんだとよ。

マリコ あたしもヒロシのことは普通に愛してるわよ。

正雄 なんだお前ら。どうして本気で愛さないんだ。おいマリコ、どうしてこんなやつと一緒にいるんだ。

マリコ だって、そんなの愛してるからに決まってるじ



やない。

正雄　なんでこんなやつのことを愛してんだ。

マリコ　そんなの、愛するのに理由なんてないでしょ。

普通に愛してるのよ彼を。彼を愛するのが当たり前なのよ。結局お父さんはね、これのことを愛してなかったのよ。

正雄　違う、俺はこれのことを愛してたよ。

マリコ　いや、お父さんはこれのことを愛してなかったのよ。

正雄　本当にこれのことを愛していたよ。

マリコ　じゃあ仮に、超人気アイドルがやってきて、お父さんに告白したとしたら、どうするのよ。

正雄　それは、それは、お前はスフィックスだからな、それは、難しいよ。

ヒロシ　（脱いでる）そういうことなんですよ。つまり、私たちは、不倫なんです。浮気じゃなくてね。わかりましたか、正雄さん。

正雄　なぜお前に正雄さんって呼ばれなきゃいけないんだ。

マリコ　いいじゃない、私だって陰では正雄って呼んでんだから。

正雄　え、正雄って言うてんのか？

マリコ　当り前でしょ、あんたのことお父さんだと思っ  
てないから。

ヒロシ　ま、そういうことだから、正雄さん。

正雄　お前は正雄さんって言うな。

ヒロシ　じゃあ、マサぴよん。

正雄　ああ！

ヒロシ　（マリコに）マサぴよん面白いね。

正雄　おいお前、こんなことしてただですむと思っ  
てんのか。お前は、マリコの家を壊したんだぞ。どう責  
任取るんだ。

ヒロシ　あなた、自分を棚に上げてよくそんなことが言  
えますね。

正雄　関係ないんだそれとこれとは。

ヒロシ　しかし、壊れていたんですよ、それはもともと。  
彼女の夫が不倫していたんですから。

正雄　……え、え？

ヒロシ　ですから、彼とは円満に協議離婚していただい  
て、僕と結婚しようと。

正雄　ん、ん？

ヒロシ　まあ、大丈夫です。僕も、今の奥さんと別れま  
すから。

正雄　待て、お前も結婚してるのか？

ヒロシ　はい、まあ。

正雄　じゃあ、なにか？　この3人はみんな結婚しなが  
らにして不倫してるのか？

ヒロシ　ええ、そうなりますね。

正雄 どうなってんだこの国は！ 性が乱れている！  
ヒロシ まあそういうわけで、2カ月後に結婚予定です  
ので、よろしくお願いします。マサピよん。

正雄 てめえ、てめえよ！

ヒロシ はい？

正雄 仕事は何やってんだ。どうせロクでもない仕事だ  
ろ。

ヒロシ 普通のサラリーマンですよ。

正雄 どの会社だ？

ヒロシ コンドル・カンパニーっていう、結構大きな会  
社ですけど。

正雄 （無気味な笑い）ザマア見やがれ……！ 俺もコン  
ドルで働いてんだ。

ヒロシ ああ、そうなんですか。

正雄 （脱ぎながら）こう見えて、俺は会社じゃ結構偉い  
方なんだぜ。社長ともかなり仲良しだしな。若造の社  
員一人や二人簡単にクビにできるんだ。へへへへへ、  
ザマア見やがれ！

ヒロシ へえ、仲がいいんですね、僕の親父と。

正雄 （驚愕）ま、まさか、山岡社長のご子息で  
いらつしやいましたか……！

ヒロシ ええ、まあ。

正雄 （無気味な笑い）

ヒロシ （マリコに）マサピよん、きつとコメディアンの

才能があるよ。

正雄 あのお、あのお、

ヒロシ はい？

正雄 もしかして、あのお、私、クビになったりとかし  
ませんよね。

ヒロシ ああ、どうでしょう。僕も社長とかなり仲良し  
で、古株の社員一人や二人簡単にクビにできますけど。  
正雄 ……なるほどね。よし、キミたちの結婚を認めよ  
う。

マリコ え？

正雄 俺も大人になろう。大丈夫だ。

ヒロシ でも、いいんですか？ 不倫ですよ。

正雄 不倫？ 不倫がなんだ。だって浮気じゃないんだ  
ろう。いいんだそれは、些細な問題だからね。それに  
比べて、日本の少子化の問題は深刻だ。ねえ？

ヒロシ （マリコに）って言うてるけど、マサピよんはク  
ビにした方がいいと思うかい？

マリコ いいよ、こんな奴クビにしちゃって。

ヒロシ （正雄に）じゃあ、クビ。

正雄 はい？

ヒロシ ですから、クビ。

正雄 （無気味に笑って）さすがは山岡社長のご子息。面白  
い冗談ですよ。

ヒロシ いや、クビですよクビ。全然冗談じゃなく。

正雄 （無気味に笑って）なってねえなあ。……なってねえなあ。これだからダメなんだよ近頃の若造は。

ヒロシ なにがダメなんですか？

正雄 会社っていうのはよ、理由なくクビになんかできねえんだよ。急に社長と親しい俺がクビになってことになれば、これはおかしい話だ。そんなことになったら裁判沙汰になっちゃうかもなあ。そしたら会社のイメージガタ落ちだ。今度お前と会うのは法廷になるかもしれない。ええ？ なんにも言えねえか。へへへ、残念だったなあ、長年会社のために働いてきた俺に、クビになる理由なんてねえんだよ！

ヒロシ 不倫してたじゃないですか。

正雄 ああ……！

ヒロシ バカなんですわね、マサびよんは。

正雄 俺は、俺はどうすればいいんだ。

マリコ どうすればいいと思う正雄？

正雄 え？

マリコ ……あんたお母さんのことどう思ってるのよ。

正雄 お母さん？

マリコ お母さん、3回目の結婚で、今度こそはって意気込んでたのよ。どうすんのよ。

正雄 そ、それは、

ヒロシ まあ、3年かけて、普通に愛してみたらどうですかね。

正雄 え？

ヒロシ しかしまあ、難しいものですよ、普通に愛するというのは。なにせ、普通にですからね。

正雄 それは、俺にもできるのか。

マリコ 誰でもできるわよそんなの。

正雄 それか。俺は決めた。この3年間は母さんを普通に愛する。そうだ、それなんだ、俺がするべきことは。ヒロシ （拍手）素晴らしい。あなたは自分の人生に対して素晴らしい答えを見つけました。自分の人生の目的を定める。これはなかなかできるものではありません。本当に素晴らしい。

正雄 いや、そんな。

ヒロシ （やや遠くを歩いている男を指して）そのチャラチヤラしてるキミも、普通に愛し合っているのか。いいのか、そんな年の離れたヤツを相手にして。どうせお金の関係なんだろう。そんな愛はやめて、普通の愛を見つけないさい。

マリコ ……。（その男の隣の女を見ている）

ヒロシ どうかした？

マリコ お母さん……。

ヒロシ ……まあ、とは言っても、人生なんて人それぞれだからね。頑張りなさい！ もう行っている。

マリコ ……まあ、あたしたちの結婚とは全然関係ないから。

ヒロシ そうだね、僕たちの結婚とは全然関係ないし。  
……あ、部屋の準備できましたか？ わかりました。  
（正雄に）あ、よかったですね、人生の計画が定まつて。  
（マリコに）じゃ、行こう。  
マリコ うん。

マリコとヒロシは退場する。

正雄 ……あ、部屋の準備できたんですか。ええと……、

正雄はこれからどうしたものかと考え、とりあえず、

正雄 ……とりあえず、（佳恵の死体を指して）警察呼んで  
もらっていいですか。

—幕

作・小佐部明広